

万葉集

まんよふしゅう

額田王の歌

巻第一

ぬかたのおおきみ うた
にきたつ ふなの ん つきま

熟田津に船乗りせむと月待てば

しお い いま こ い

潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

みわやま しか かく くも

三輪山を然も隠すか雲だにも

こころ かくそ う

心あらかなも隠さふべしや

むらさきの ゆ しめの ゆ

あかねさす 紫 野行き標野行き

の もり み きみ そでふ

野守は見ずや君が袖振る

ひつぎのみこ こたえ みうた

皇太子の答へし御歌

むらさき おえ いも にく

紫 のにほへる妹を憎くあらば

ひとづま え われこい

人妻ゆるに我恋ひめやも

【参考資料】

- 『新日本古典文学大系1（万葉集1）』（岩波書店）
- 『万葉集1 全訳注原文付』中西進／校注（講談社文庫）

万葉集

まんようしゅう

持統天皇
じとうてんのう

巻第一

はるす
なつき
春過ぎて夏来たるらし
しろえ
白たへの

ころもほ
あま
かぐやま
衣干したり天の香具山

柿本人麻呂
かきもとのひとまる

巻第三

おおきみ
かみ
あまくも
大君は神にしいませば天雲の

いかずち
うえ
いお
雷の上に廬りせるかも

小野老
おののおゆ

巻第三

お
なら
みやこ
さ
はな
あをによし奈良の都は咲く花の

におう
いまさか
薫ふがごとく今盛りなり

【参考資料】

- 『新日本古典文学大系1（万葉集1）』（岩波書店）
- 『万葉集1 全訳注原文付』中西進／校注（講談社文庫）

万葉集

まんようしゅう

やまへのあかひと
山部赤人

卷第三

あめつち わか とき
天地の 分れし時ゆ
かむ
神さびて
たか
高く

とおと するが ふじ たかね あま
貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の

はら ふ さ み わた ひ かげ かく
原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠

い て つき ひかり み しらくも
らひ 照る月の 光も見えず 白雲も

ゆ とき ゆき ふ
い行きはばかり 時じくそ 雪は降りけ

かた つ い い つ ゆ ん ふじ
る 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の

たかね
高嶺は

たご うら い み しろ
田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ

ふじ たかね ゆき ふ
富士の高嶺に雪は降りける

【参考資料】

- ・『新日本古典文学大系1（万葉集1）』（岩波書店）
- ・『万葉集1 全訳注原文付』中西進／校注（講談社文庫）

万葉集

まんよふしゅう

おおもものやかもち
大伴家持

卷第十九

はるの かすみ
春の野に霞たなびきうら悲し
がな

ゆうかげ いな
この夕影にうぐひす鳴くも

わ ささむらたけふ かぜ
我がやどのい笹群竹吹く風の

おと ゆうべ
音のかそけきこの夕かも

て はるひ あ
うらうらに照れる春日にひばり上がり

こころかな おもえ
心悲しもひとりし思へば

卷第二十

あたら とし はじ はつはる
新しき年の初めの初春の

きょうふ ゆき よごと
今日降る雪のいやしけ吉事

【参考資料】

- 『新日本古典文学大系4（万葉集4）』（岩波書店）
- 『万葉集4 全訳注原文付』中西進／校注（講談社文庫）

万葉集

まんようしゅう

おおつのみこ
大津皇子

卷第三

ももづたう いわれ いけ な かも
百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を
きょう み くもがく
今日のみ見てや雲隠りなむ

おおくのひめみこ
大来皇女

卷第二

うつそみの人なる我や明日よりは
ひと われ あす
ふたがみやま いろせ あ みん
二上山を弟と我が見む

【参考資料】

- ・ 『新日本古典文学大系1（万葉集1）』（岩波書店）
- ・ 『万葉集1 全訳注原文付』中西進／校注（講談社文庫）

万葉集

まんようしゆ

巻第五

梅花の歌三十二首 序を并せたり

てんびようにねんしょうがつじゆうさんにち そちろう いえ あつ

天平二年正月十三日、帥老の宅に萃まり、

えんかい の とき しよしゆん れいげつ きうるわ
宴会を申ぶ。時に、初春の令月、氣淑しく

かぜやわ うめ きようぜん こ ひら らん はいご
風和らぐ。梅は鏡前の粉に披き、蘭は佩後の

かおり かお しかのみにあらず あげほの みね くもうつ
香に薰る。加以、曙の嶺に雲移りて、

まつ ら か きぬがさ かたむ ゆうべ くき つゆむす
松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に露結

とり こめのきぬ とぎ はやし まよう にわ
びて、鳥は穀に封されて林に迷ふ。庭に

しんちようまい そら こがんかえ おい てん
新蝶舞ひ、空に故雁帰る。ここに於て、天を

きぬがさ ち しきい ひざ ちかず さかすき と
蓋にし地を坐にし、膝を促け鶺鴒を飛ば

す。言を一室の裏に忘れ、矜を煙霞の外に
開く。淡然として自ら放にし、快然とし
て自ら足る。若し翰苑に非ざれば、何を以て
か情を攄べむ。詩に落梅の篇を記す。古今
それ何ぞ異ならむ。宜しく園梅を賦して、
聊かに短詠を成すべし。

【参考資料】

- ・『新日本古典文学大系1（万葉集1）』（岩波書店）
- ・『万葉集1 全訳注原文付』中西進／校注（講談社文庫）